河口から

大林　豊

河口からコンクリートで護岸された堤防を、上流に向かって一キロほど行くと突然やかましいヨシキリの声がする芦原に出た。

啓はそのとき芦原の中で鳴く小鳥の声とは違う音を感じて自転車を止めた。耳を澄ますとたしかにやかましいヨシキリの声のなかにかすかに別の音が聞こえてくる。音楽だ。ラジカセから流れてきているらしい。それともだれかが楽器を奏でているのだろうか。その音量は、けたはずれて耳の良い啓でなければ聞こえないであろうかすかな音であった。　啓はそのまま通り過ぎようとしたが、なぜかその音が気になって、芦原をかきわけて音のするほうに近寄っていた。はっきりと聞こえてきた音楽はモーツアルトの曲だった。啓が幼いころ何度も何度も聴いた曲である。はっきりは覚えていないが、小学校に上がるころまでは聴いていたと思う。だれに聴かされたかははっきりと記憶にない。父でも母でもないことはたしかだ。そうなると、当時同居していた大学生であった父の弟だったのかもしれない。この曲がモーツアルトの曲であることは、去年、学校の音楽の授業で聴かされてはじめて知ったのである。

ヨシキリの声と曲が重なってかもしだす不思議なハーモニーに魅せられて、啓がさらに音のするほうに近づいたときだった。

「来るな、これ以上近寄ると刺すぞ」と圧し殺した低い男の声がした。

啓は突然の声に足がすくんでその場に立ち止まった。おそるおそる声のするほうを見ると、芦の葉かげに髭ずらの男の顔があった。一〇メートルほど離れているが、ぎらぎらした大きな目がこちらを見すえているのがすぐそばにいるように感じた。しばらく沈黙が続くが、音楽はなりやまずに続いている。その軽快なメロディーが恐怖心をやわらげてくれたのか、啓は少し落ち着きを取り戻してきた。そして、この男の顔をどこかで見たような気がして思い起こそうと記憶をたどっていた。

（そうだ、あのときの男だ）

それは一か月ほど前だった。啓が河口に近いほうの堤防を自転車で走っていたとき、ホームレスの青シートのテントめがけて石を投げつけいる数人の非行グループに遭遇した。この堤防でときどき見かけるグループなので顔は見えなくても体つきから遠目にもすぐそれとわかった。近づいた啓は、かかわりたくなかったので引き返そうか通り抜けようかと迷いながら自転車の速度をゆるめたときだった。突然テントの中から刃物を振りかざした男が飛び出してきて大声でわめき出した。少年たちは恐れをなして、二台の自転車に分乗して川上のほうへ向かって逃げ去って行った。男は啓を見て、逃げそこなったひとりと間違えて二三歩近寄って来た。啓があわてて逃げようとすると男は「今度やったら、しょうちしないからな」と言ってテントの中に戻って行ったのだ。

啓は、あの日のことを思い出しながら男の顔を見ているうちに、恐怖心が徐々に薄らいでくるのを感じていた。たしかに男の顔はどうもうな獣のように見えるが、こちらをまっすぐに見る目の中に、なにかぴりぴりと伝わってくるものがある。それは、孤独な体験をへたものでなければ発信することができない心の信号のようなものが。

「おれ違うよ。あのとき石を投げてた仲間とは関係ないよ。たまたま通りかかっただけなんだ」

「・・・そんならなんでいまごろおれの居場所をみつけ出してやって来たんだ」

男の声にも、さっきとは違いなんとなく親しみを含んでいた。

「音楽が聞こえてきたから・・・」

「音楽が聞こえただと・・・おれはいつも道路までは聞こえない音量にしてるんだぞ。普通の人間に聞こえるはずがない」

「おれ、耳だけはほかの人よりもよく聞こえるから」

男はだまって啓をうかがっていたが、しばらくするとこちらに来るようにと手招きをした。啓はなにをされるかわからないのでとまどっていたが、なぜかおそるおそる芦をかきわけて男のほうに近づいていた。

そこだけ芦が刈り取られた空間に刃物を持った長身の男が立っていた。

初老というには少し早いか、伸びほうだいの髪もひげもくろぐろとしている。その脇に低く張られた青シートのテントの中から、さきほどの曲がゆったりとした第二楽章に変わって流れてくる。刃物をしまった男は先に立ってテントのそばに行き、啓に中に入るように促した。

中に入るといっても屋根だけのテントなので傘の下に入ったというほうが正しい。畳二枚ほどのテントの下には、刈り取られた芦が敷きつめられて、その上に寝袋が敷かれていた。芦か寝袋かはわからないが、あまずっぱい匂いが鼻をつく。寝袋の上にはリュックと手提げ袋がおかれており、音楽はその手提げ袋の中から聞こえてくるようだ。

啓が座ると、男は手提げの中からパンを二つ取り出して、その一つを差し出した。啓は一昨日の夜からなにも食べていなかったので思わず手を伸ばして受け取っていた。男はパンの包装をむしり取ると、大きな口を開けてかぶりついた。啓も男にならってかぶりつく。口の中に甘いクリームパンのにおいが広がってくる。一分とかからないでパンをたいらげたふたりは、口をもぐもぐさせながら互いに顔を見合わせた。男ははじめて白い歯を見せて笑った。啓もつられて目で笑うが、じぶんが笑ったり人としゃべったのは何年ぶりだっただろうと自問した。啓はさらに、男がとても澄んだきれいな目をしていることに気づいて、すっかり男への警戒心を解いていた。男は啓にはまったく関心がないようすで、ぶつぶつつぶやいたり音楽に合わせて足を動かしたりしている。しばらくして

「さてと、引っ越すとしようか。おまえにねぐらを知られてしまってはここにいるわけにいかないからな」

男は立ち上がると青シートのテントをはずしにかかった。

「おれ、だれにもしゃべらないよ。ずっとここにいたら？」

「いや、ぼつぼつ引っ越そうと思ってたところだから」

男はなれた手つきでテントをたたみ、寝袋をまるめてリュックのひもに結わえつけると、もう引っ越しの準備は終わっていた。

男はリュックを背負うと、道路とは反対の方に向かって芦をかきわけながらのっしのっしと歩いて行く。その後ろ姿は、逃げ出して行く男には見えずたくましくて威厳さへ感じられた。ヨシキリの声が一瞬止んで、芦を

かきわけるがさがさという音だけが騒がしく聞こえてくる。
　啓は自転車を置いた道路に戻ろうとしたが、磁石にでもひきつけられるように、芦が揺れるのをめじるしに男の後を追っていた。川岸に出たところで男は立ち止まっている。追いついた啓の足音を聞いて振り返った男は、けわしい顔をして啓を見た。
「いっしょに行く気か」
　啓がうなずくと、男の顔は急に柔和になった。男は辺りを警戒するように見回してから、やや川下のほうの茂みに入って行き「手伝え」と啓を呼んだ。啓が近づくと、そこの芦の茂みに青いゴムボートが隠されていた。
「ここで釣りをしてたら、流れて来たんだ。けっこう役に立つよ」
　そっちを持てと言うようにあごをしゃくった。ボートの片方を啓が持つと、男はもう一方を持って用心深く後ずさりして川岸まで運んだ。
「ふたり乗ってもへいきだよ。親子で水遊びをしているとだれもあやしまないさ」
　男はもう一度茂みに戻って、カヌー用のオールを持ってきた。男は浮かべたボートに乗ると試運転でもするようにその辺りをぐるぐると漕いだあと、啓のところにボートの尻を接岸した。啓が足をかけるとボートは大きく揺れたが、男の言ったとおりふたりをなんなく受け止めて静止した。男はなれた手付きでオールを漕いで、どうやら対岸との中ほどにある中州に向かうようだ。突然川上のほうからモーターボートの音が聞こえてきて目の前をボートに曳かれた水上スキーの若者が通り過ぎて行く。
「気をつけろ！」男は大声で叫んで余波で揺れるゴムボートの体勢を整える。
　たどり着いた中州は、対岸から見ると長さが三〇メートルほどに見えたが、来てみるとその二倍の広さはありそうだ。いままでいた岸辺と同じように、一面芦が生い茂り人の入った形跡がない。ゴムボートを引き上げてから、男はリュックの中から潮干狩りに使う網袋を取り出すと啓に渡した。さらに芦原の中に隠しておいた潮干狩りの熊手をさがし出してくると、先に立って歩き出した。中州の水際は、ぬれた砂地が通路の役目をして歩くに不便はない。だだ、ところどころに発泡スチロールやビニール袋、ネコ

の死骸などがあって、人が住むには快適な環境とはほど遠いようだ。啓は、もし男とここに住むことになるのではと思うといい感じがしなかった。少し行くとやや砂地が広がったところに出た。男が水辺にしゃがみ込んで熊手で砂をかきまわすといくつかのシジミ貝が出てきた。男は啓にそれを拾うようにと目で合図を送り、さらに深く砂をかきまわす。今度は大粒のシジミがおもしろいように出てくる。わずか一〇分もたたないうちに三つの網袋はいっぱいになった。　中州をひとまわりして、もう少しでボートを置いた場所に着こうとしたとき、ふたりはあっと声をあげて足を止めた。砂の上に灰色の半袖シャツと作業ズボンの男がうつぶせになって倒れているのが見えたからである。

「げんさん・・・げんさんじゃないのか」

　しばらく目をこらしてみつめていた男は、駆け寄って倒れている男の肩をつかんで引き起こした。ぷうんと死臭が鼻をついてハエが数匹舞い上がった。深くかぶった野球帽の下から柔らかい白髪がはみだしており、砂にまみれた口から白い歯がのぞいている。

「だれにやられたんだ。ちくしょう、ちくしょう」

　男は何度も叫んで死体の肩をゆさぶった。

「こいつとは、三か月もいっしょに暮らしてたんだ。・・・いいやつだったのに」

　男は、ひとり言ともとれるような沈んだ声でつぶやいた。男は立ち上がってゴムボートのところに走って、オールを持ってくると砂と芦の境目の辺りを狂ったように掘りはじめた。汗とも涙ともつかないものがぽたぽたと地面に落ちている。啓も近くにあった板切れで手伝ううちに、死体がすっぽりと収まるくらいの穴になった。

　男が頭を、啓が足を持って掘ったばかりの穴に死体を入れると、男は足元から順番に砂をかけ、顔のところで手を止めると腰から手拭を取って顔のよごれをきれいに拭いている。啓はずっとその動作を見ていたが、死人の顔を見るのが気味悪くて何度も目をそらしていた。男は死体に砂をかけ終わると目をつぶっていつまでも合掌している。啓もつられて合掌するが、母が死んだときのことを思い起こしてやり切れない気持ちになっていた。

あれからもう五年近くたっていた。この河口から20キロほど上流の郊外に啓の一家は住んでいた。堤防を降りた河川敷には運動広場があり、啓は友達と毎日のようにそこでサッカーボールをけって遊んだ。川幅の広いゆったりとした流れには、大きな掛声でボートを漕ぐ学生の姿をよく見かけたものである。

啓が小学校三年生の夏休みを前にした暑い日のことであった。学校から帰ると、母が居間の床の上に倒れていた。

「お母さん」と啓が駆け寄って手を取るが、母はもう冷たくなっていた。救急車を呼ぶことも気がつかず、啓は母にすがって長い時間泣き続けていた。隣のおばさんが啓の泣き声に気づいて大騒ぎとなったのであった。

父は事件の前の晩、酒によって母に暴力をふるって出て行ったきり姿を見せなかった。母方の叔父が来て葬式を出してくれた。葬式の後警察が来ていろいろ聴かれたが、母の啓宛の遺書がみつかったことで事件とはならなかった。しかし、啓は父が母を殺したにちがいないとお思った。それは、これまで父の母に対する暴力と、パートで得た母のお金をむりやり持ち出していく父の姿をを何度も見ていたからである。

父の居場所もわからず、身寄りのなくなった啓は叔父の家に引き取られることになった。叔父の家は、いままでのところからさらに50キロも上流の山間で果樹栽培をしていた。ひとつ年下の健太という男の子がいた。渓流でハヤなどの川魚を捕るなど、いままでになかった遊びに夢中になることで、昼間は母の死を忘れることがあったが、夜、布団に入ると母が恋しくてたびたび枕ををぬらすのであった。

叔父は健太とわけへだてなく声をかけてくれたが、叔母のほうは健太を見る目と違って日ごとにその目がけわしくなっていた。

それから一年ほどして啓は施設にあずけられることになったのである。いとこの健太ををいじめるというのがその理由であった。いまになって考えると、母のいないひがみや後に引かない強情な性格が、健太にいじめと受け取られたのかもしれない。

『希望の家』という施設でも、要領のわるい啓は古株の先輩の罪をきせら

れるなどして、いつもわるものにされていた。かばってくれる同年の仲間がいたが、いつの間にか啓から離れていった。学校でも同じだった。施設の子という同情の目はあっても、心から友達になろうとする者はいなかった。こうして啓は、いつのまにか笑わないしゃべらない少年になっていたのである。

啓は、中学校の入学を前に施設を逃げ出した。この河口の河川敷の生活をするようになって三か月がたっていた。この河口を選んだのは、生まれ育った川の風景が啓の心の片隅から離れなかったからかも知れない。それと、よく夢の中に現れた母がひょっこり川面に浮かび上がって来るような気がしてならなかったからでもある。

啓がここに来て一番気をを配ったことは、絶対補導されないということである。補導されて施設に連れ戻されることだけは避けたかったからである。そのためには悪いことをして警察につかまらない。それと、だれかに昼間学校をさぼって遊んでいるようなそぶりを見せないことだった。だから、学校の時間帯はアシの茂みや橋脚の下などで過ごし、朝早くか放課後しか人目につくところには行かなかった。日がたってわかったことだが、けっこう昼間から学校をさぼって堤防や河川敷でたむろする非行グループを見かけた。彼らの仲間と間違えられると補導される恐れがあるので、できるだけ近寄らないようにしている。彼らは補導されたとしても保護者が注意されぐらいで終わるが、啓の場合はそうはいかないからである。コンビニの安いお握りやパンなどで、できるだけお金を使わないようにして食いつないで来た。しかし、母の形見のお守りの中に入れられていた数枚の一万円札はもう小銭すら残っていなかった。

合掌を終えた男の目に涙が残っていた。啓もあれ以来のできごとを思い起こしていたので、男のものとは違う涙がほおを伝っていた。

「あっ、雨になりそうだ」

男は小さく叫んで空を仰いだ。六月になっても晴れた日が続いていたので、梅雨の到来に気がつかなかったようだ。

「おい、掘り返そう。川が増水したらひとたまりもないじゃないか」

男があわてて埋めたばかりの死体を掘り起こすのを見て、啓はそのわけをのみこむことができた。男は掘り起こした死体の顔や着衣についた砂をていねいに払い落とすと、啓を促して死体をゴムボートに運んだ。

死体を乗せたボートが中州から芦の岸辺に着くと、男は啓に花を摘んでくるように命じた。啓がタンポポとシロツメ草を摘んで戻って来ると、元さんという死体の男はボートにしっかりと結わえつけられていた。

「これでよし。少々揺れても転げ落ちることはないだろう。・・・立派な水葬だ。元さんを土左衛門してたまるかってんだ」

男は、啓が摘んできた草花を顔のあたりにぱらぱらと落とすと涙を拭った。ボートを川の中ほどに押しやると、ボートは一瞬大きくゆれたが、へさきを川下に向けてゆっくりと流れて行く。雨がぱらぱらと落ちて来た。啓は、ボートが無事に海に出てくれるようにと祈った。

「さてと、ボートがなくなったし・・・おまえこれからどうするんだ。金もなくなったんだろう」

啓は図星をさされて顔を赤らめた。

「人間なにをしたってかまわないけどな、誇りだけはなくしてはいけない。おまえが家出みたいなことをしているのも、誇りを失いたくなかったからではないのか。うん、誇りを捨ててまでしがみついていることなんかないものな」

啓は、自分のことを何も話していないのに、男がまるで何もかも知っているように言うのでとまどっていた。

啓はきのうの夕方、空腹に耐えられなくて万引をしようとコンビニに入った。（悪いことは絶対しない）と心に誓ったのは何だったのかと自分に腹が立った。人のいないのを確かめてパンの棚に手を伸ばそうとした。急にほおがほてってきて心臓が早鐘を打つ。そのとき、だれかに後ろから腕をつかまれたのを感じた。はっとして後ろを振り返るが、そこにはだれもいなかった。ほっとするが体じゅうに冷汗がわきでてきて頭の中が真っ白になった。結局なにもできないで、ポケットに残っていた百円玉でガムを買って逃げるように店を出たのであった。男の言う、失ってはいけない誇りを、もうすこしで捨てるところだったと思うとぞっとした。また、叔

父の家や施設で屈辱に絶えながらしがみついていなくてよかったと思うのだった。それにしてもパンの棚に手を伸ばしたとき腕をつかんだのはだれだったのだろう。『やさしく強く生きるんだよ』と遺書をを残して死んだ母だろうか。「行くぞ」日が西に傾くのを待って、男は立ち上がった。シジミの袋を啓の自転車の篭に入れると、男は先に立って歩き出した。

堤防の道路を降りて人家の並ぶ集落に来ると、男は小さな赤茶けたトタン板の家の前に来て立ち止まった。

「おおい、シジミ屋のおばさんいるかあ。シジミを持って来たよ」

男が戸をたたくと、中から白髪のおばあさんが出て来てにこにこして頭を下げた。

「きょうはお弟子さんもいっしょですか」

おばあさんはやさしい目で啓を見た。

「ところで、せがれさんはいつ帰って来るの」

「きょう帰ると電話があったよ。まもなく来るんじゃないかな」

「それじゃ、いつも車を止めるところで待ってるわ」

男はおばあさんからシジミの代金千円札を一枚受け取ると啓を促しておばあさんの家を離れた。

夕暮れが迫っていた。雨は止んでいたが雲が低くたれていて川面は夜のように薄暗い。ゴムボートで流した元さんの死体はもう海に流れ着いただろうか。啓が思い巡らしていると車の音がして、堤防の下の道路の脇に大型トラックが止まった。

「よう、山さん」と男が運転席に向かって手をあげた。

「しばらくでしたね。待ってたんですか」

運転席の窓を開けてやせた男が身を乗り出して笑っている。

「さっき、おかあさんのとこへシジミをもって行ったら、きょう帰って来ると言ったもんで」

「なにか用か」

「うん、ちょっと頼みたいことがあるもんで」

「車の中に入ったら」

山さんという男は運転席の反対側のドアを開けた。男が啓にも乗るよう

に促してふたりは広い助手席に乗りこんだ。
「この次はいつ発つの」
「いや、荷物を積み込んだら明日にでも。・・・顔を見せないとおふくろがおこるもんで寄ってみたんだ」
山さんはたばこの煙を輪にしてふっとはき出した。
「実は、こいつを連れて行ってもらいたいんだ」
男が啓を見てあごをしゃくった。山さんは啓を見て不思議そうな顔をした。
「かまわないけど。・・・どこで降ろせばいいの」
「フェリーが着いたとこでいいよ。・・・それとも少しでもオホーツク海に近いほうが」「今度は帯広だから苫小牧よりはすこし近いかな。それでよければ」
啓はふたりの会話を聞いていて、それが自分のことであるということに気がつくまでに少こし時間がかかった。
「それって、おれのことじゃないでしょう?」
啓は男の顔を見て驚きの声をあげた。
「いや、すまん。相談なしにかってにきめてしまって」
男は啓に頭を下げて謝った。
「そんなのないよ。いったいどこへ行けというんだ。いやだよ」
啓は、もしかするとこのふたりは人買いではないかと身ぶるいした。
男は背筋を伸ばして向きなおり啓の目をを真っすぐに見た。その目は人買いの目ではなく、元さんの死体を葬ったときのきびしくてやさしい目であった。
「おまえ、家出をして何日になる。一週間や二週間ではないだろう。このままこの川辺にいてどうするつもりだ。おどおどしながら人のものを盗んで食いつないでいこうとでも思ってるのか。どんな事情があるかは知らないけどな、おまえがこの世に生を受けて、ここにかけがえのない命をいただいているということは、おまえがどう生きようと勝手ということではないのだぞ。人はだれでも、そのかけがいのない命をせいいっぱい生きる義務があるのではないのか。・・・自分のことを棚に上げてむずかしいこと

を言ってわるいな。おせっかいかもしれんが、これからおまえが行くところには、すばらしい人たちが待っているよ。おまえがこれから何十年も生きていくために欠かすことができないかけがえのない人たちだ。・・・この運転手のおじさんもいい人だ、安心して乗せてもらいなさい。それともおまえ、家に帰るつもりか。それならそれがいちばんいいことだが」

「おれ、じぶんの家なんかないよ。・・・だれがあんなところへ帰るもんか」

啓は叔父の家や施設の生活を思い浮かべて、すてばちに語気を強めた。

「それならなおさらだ。行きなさい。一か月いて気にいらなければ戻って来るがいいさ。おれも近いうちにはここを引き払ってそこに行くつもりだが」

男はリュックの中からノートを一冊取り出すとぱらぱらめくり、何も書いていない一枚に何やら書きはじめた。書き終わるとそれを破り取り時間をかけてていねいに折りたたんだ。その余白にオホーツク村吉村英雄という相手の名前と住所を書き込んで啓に渡した。「帯広からだと、おまえの足なら自転車をこいで三日で行けるだろう。一日三百円でがまんするんだぞ」

男はさっきおばあさんにシジミを売った千円札を差し出した。

啓はいったい自分になにが起ころうとしているかがわからなかった。わからないというよりもこの唐突なできごとを頭の中で整理がつかないのだ。ただ、この人たちが啓のことを真剣に考えてくれているということだけははっきりとわかった。千円札を受け取るかどうか迷っている啓に

「人の善意は素直に受けたらどうだ」

山さんが啓の顔をのぞきこむようにして言った。“善意”啓は言葉の意味はわかっているが、母が死んだ後その善意というものを受けた覚えがなかった。もちろん自分からそのようなものを人に与えたことも。ほおのあたりが引きつっているのが自分でもよくわかる。なにかを思い出そうとしているのだが、頭の中に霧がかかったようでなにも出てこない。啓は、夢の中で道に迷っているときのようなもどかしさで金縛りにかかったように身動きができなくなっていた。

そのとき、どこからか静かな音楽が聞こえてきた。モーツアルトだ。芦原の中から聞こえてきたモーツアルトの曲が流れてくる。頭の中にかかっていた霧のようなものがすうっと消えて行った。すると、啓のほおに涙が一筋流れた。それが呼び水となって次から次ぎえと涙があふれてきた。やがて啓は肩をふるわせて声をあげて泣き出していた。

「男の子が泣いたりするな」

男の声に、啓ははっと息をつまらせるが、さらに大きな声をあげて泣き続けづけていた。「それじゃおれはこれで。山さんたのんだよ。・・・ああ、これ持って行け」

男は、手提げ袋からラジカセを取り出して啓のひざの上に置くと車から降りた。外はすっかり暗くなっていた。男は振り返ることもなく堤防を河口の方に向かって大股で歩いて行く。その後ろ姿はすぐに闇に消えて見えなくなった。

山さんの家で一夜を明かした朝、啓はトラックの助手席にいた。

「自転車も積んだし、忘れ物はないか」

山さんの声に、啓はひざの上の下着の入ったリュックを見た。そして男にもらったモーツアルトのラジカセをリュックの外から押さえて確かめた。

「それじゃ行くか」

エンジンの音に、見送りに来ていたおばあさんが笑顔で手を振っている。啓も手を振って笑顔で応えた。

流通センターの倉庫で積み荷を終えたトラックは、再び堤防に沿った道路を河口に向かって走る。右折すると、海とも川とも境目がわからないくらい広い河口に出た。長い長い旅を終えた川の水は、いま海へ流れ着くところだ。車はぐるっと大きくカーブして高速道路に出た。そこにかけられた長い橋の中程にさしかかったときだった。

「あれは！」啓は思わず叫んでいた。橋の海寄りのほうに青い小さな漂流物が浮かんでいるのが目に留まったからである。車がスピードを上げていたので、ほんの一瞬であったがたしかにあのゴムボートに違いなかった。人目にふれることなく海に流れ出てくれるに違いない。どうか果てしなく

遠くの海原をいつまでも漂うがいい。それが男が言った水葬なのかもしれない。

啓は河口を後にして、自分もいま海に流れ出て行くことを思っていた。ここを出て、はたして男が言ったすばらしい人たちに巡り会うことができるのだろうか。北の果てのオホーツクの海辺に、なにが自分を待っているというのだろうか。期待と不安が交錯するなかで啓は目をつぶった。

「もうじきフェリー乗場だ」

山さんの声に、まどろんでいた啓は、はっとして通り過ぎた河口を見ようと後ろを振り向いた。しかし、トラックの荷台で後ろを見ることはできない。一瞬啓の脳裏に早送りのビデオのように過去のできごとが走り去った。啓はそれを後ろのほうにに追いやるようにして目を閉じた。

目を開くと、前方の埠頭に真っ白な豪華客船を思わせるフェリーが姿を見せている。その背景の黒い雨雲から一筋光が走った。稲妻かもしれない。

了